

令和2年2月13日

# 南の風 331

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

矢田 香子先生が指導されていた「岡崎子どもバスケットボール教室」は、1980年代後半から90年代にかけて何度も全国大会に出場し、1991年～1993年まで全国大会3連覇を果たしたチームです。

岡崎子どもバスケットボール教室は、名前から分かるように岡崎市のいくつかの小学校から子どもたちが集まったチームです。毎年6年生が揃い、素質のある子がいたのも事実です。

しかしこのチームは強いだけではなく、あいさつやマナーにも秀でていました。全国大会に出場すると、開会式の入場の折に一糸乱れぬ行進を行うのです。そして貴賓席の前を通過する時にキャプテンが笛を吹くと、選手全員が貴賓席に向かって片手を挙げて敬意を表すのです。全国大会の名物とも言われました。試合前や終了時の挨拶もたいへんていねいで、観客の方から大きな拍手が起こりました。

ここで、当時矢田先生に伺った貴重なお話を紹介します。

## ～ 矢田 香子先生の話 ～ ※1987年当時

### ・・・ 心をかけて 手をかけるな ・・・

最近の親や大人（ミニバスの指導者も含めて）は、子どもたちのふるまいや行動に、口を出したり手を出したりし過ぎる。それは、子どもが自ら考えることや自分でやろうとする行動力を奪ってしまうんじゃないか。大人があれこれ手を出すと、子どもが力を発揮する場所がなくなっちゃうんです。

子どもたちが「好きなことがない。」「好きなことが分からない。」とか言うのって、大人が手を出し過ぎた結果じゃないですか。

子どもの人生は子どものもの、たとえ親でも代わることはできません。子どもが病気になった時、代わってあげたいと思っても代われないように、子どもが自分で生きていくしかないんです。

じゃあ、何もしないでほっとけばいいのかっていうと、それは放棄になってしまう。

親や大人にできることは、見守ることです。親やまわりの大人（ミニバスの指導者も含めて）が見守ってくれていることが分かると、子どもは安心できるのです。

家庭生活では、「お母さんがついている。

大丈夫だよ。

やりたいようにやっごらん。」

バスケでは、「監督がみているよ。

大丈夫だよ。

思い切ってやっごらん。」

とても含蓄のあるお話しでした。33年も前に聞いたものとは思えません。現在でも新鮮で我々の胸に響き、迫ってきます。